第37号　35円
昭和50年1月25日

内容

東洋と日本…… 1
故佐藤喜一郎氏追悼記念会…… 2
共同セミナー委員会の陣容なる… 3
「大学を開く」刊行なる …… 3
千人会…… 4
会員校に成城大・千葉商大迎える 5
第71・72回大学共同セミナー…… 6
第4回国際学生セミナー…… 8
第73回大学共同セミナー…… 9
業務通信・利用状況……10

セミナー・ハウス
SEMINAR HOUSE NEWS

発行
財団法人 大学セミナー・ハウス
〈所在地〉
東京都八王子市下柚木
(〒192-03)
電話 0426-76-8511～3
振替口座 東京74590番
〈東京事務所〉
東京都中央区日本橋本町3－3
三井銀行本町支店ビル5階
電話 東京 (241) 3961
編集・発行人 飯田宗一郎
製作 中央公論事業出版

東洋と日本

国際基督教大学教授
山本達郎

「東洋」の語源は、海上貿易を行って南方に進出した中国人が、その活動範囲の中で、東方の貿易の中心を東洋、西方の中心を西洋といったことに由来する。西洋は南インドの海岸あたりをさし、東洋は東南アジア、なかでもジャワをさしたが、次第にフィリピンから台湾、琉球、さらに日本をさすようになったもので、今日でも中国でいう「東洋」には日本という意味がある。

日本では西洋に対比するものとして東洋が考えられ、西洋でないところが東洋だという感覚がかなりあるように思われる。東洋に対応する外国語としてオリエントが当てられているが、これはいうまでもなく西の方の国から見た東方の地を意味している。オリエント研究はヨーロッパで発展し、昨年パリで国際学会として東洋学者会議の百年祭が行われたが、従来の東洋学は西を中心にして東の方を見ていた研究だから、むしろアジア研究という名称を用いたらよいではないか、ということがいわれて、将来の国際会議の名称は International Congress of Human Studies in Asia とすることが決められた。今ここでは、とりあえず東洋をアジアという意味に理解して話をすすめたい。

日本とアジアの国々との関係を考える際に、われわれ日本人のアジア諸国に対する態度が基本的な問題となる。福沢諭吉の脱亜論以来、われわれはアジアの一員であるより、むしろ西洋に連なる国にしなければならないと考え、また西洋と日本との関係を上下の秩序に位置づけてきた。古くからインドや中国の優れた文化を学んできた日本は、これらの国をわれわれよりも上に置いていたが、明治初期からは、西洋の物質文化の発展、帝国主義的進出という状況の中で、アジアの国々を下に位置づけるようになった。

日本人がアジアでどのような国際関係をうち立てていくかは、われわれ日本人共通の重要課題であるばかりでなく、世界的な課題である。まかり間違えば、世界に大混乱を招きかねない。現在は、長い人類の歴史の中で、大きな転換期にあることは疑いを入れない。こうした状況においては、人権の思想に立って、異なった国の人々が互いに共通の問題を考えようという基礎がなければ、われわれの理解は成立しない。基本的に相手を尊重して接触すれば、たとえ礼儀作法が違っても、相手に通じるし、異様に映るかもしれないが、決して軽蔑されることはないだろう。このことを前提として、国際理解の方法を考えてみよう。

われわれの世界像は歴史的な理解の中で生まれる。日本人の世界像の中でインドネシアはどのような位置にあるか、インドネシアの世界像の中で日本はどうか。国際理解には向こうの人の考えの中に入ってこちらを見るという姿勢を、われわれはもっと訓練する必要があろう。どのような立場で接触するかによって、その人の見方はいくらでも展開するものである。大切なことは展開するような態度を持っていることである。国際理解が実際にどうなっているかを知るにはアンケート調査とか教科書の比較など様々な方法があるが、われわれとしていま最も重要なことは国家目標をはっきりさせることである。そして国民としての一人一人の生活目標を立てなければならない。これは大変むずかしい問題であるが国際的な関係の中でさけて通ることはできない。われわれは歴史的にアジアに根ざした国民であり、世界的変動の中におけるアジアの一員である。アジアの国々に対するわれわれの態度として大切なのは、いわば経験科学的な考え方をとるばかりではなく、進んで人間としてこうしようという未来への目標を設定することではないだろうか。例えばアジアのために働くことによって世界の平和に貢献するということはどうだろう。国家の利益のために他を圧迫することではなく、相手にサービスすることのできる目標はたてられないだろうか。尊敬されることが目的ではないが、サービスの結果は尊敬されるようになる。今、われわれ一人一人が〝私のサービスの目標〟を設定することが必要である。そして相手の立場になって相手の歴史的な背景を理解するというアプローチは、われわれがどのような目標で行動するかということと密接不可分な関係にあることを強調したい。

私は故佐藤喜一郎氏を追悼するこの機会に、大学セミナー・ハウスという一つのimaginationが実現したことに思いをいたし、われわれもまた、未来の社会や国際関係をつくるためのimaginationを持ちたいと切に願うものである。

(第73回大学共同セミナーの主題講演より。故佐藤喜一郎氏追悼記念会の記念講演をかね同氏に捧げられたものである。文責編集者)

故佐藤喜一郎氏追悼記念会

壮麗な人格を偲ぶ感謝の集い

昭和49年11月9日

昭和49年5月24日に、三井銀行相談役佐藤喜一郎氏が亡くなられた。衆知のように同氏は当ハウスの設立に尽力されたいわば大恩人である。財界人佐藤喜一郎氏の経歴および当ハウスに寄せられた大いなる貢献については、本紙第35号の特集号に掲載されているので、ここでは多くを記さない。

当日は、佐藤家から未亡人直子氏と長男修一氏の外、財界人、大学人、官界人など多数の来賓が出席され、それに第73回大学共同セミナーの指導教授と学生および在泊中の各大学のゼミナール学生が参加され盛況であった。

記念会は、午後二時半より山本達郎先生の記念講演「東洋と日本」（1頁参照）で開始され、続いて生前、故人が幾度も足を運ばれたキャンパスの一角、同氏に因んで命名された佐藤峠にて全員の記念撮影が行われた。

追悼の集いは、生花に囲まれるように飾られた故人の大きなパネル写真を正面にして、ピアノによる奏楽を合図におごそかに開会された。演奏は、国立音楽大学二年の村越董子さん。

まず、正田理事長の挨拶、飯田館長の故人紹介があり、一同黙禱して、故人がセミナー・ハウスを通して日本の大学教育に寄せられた深い愛情とご奉仕を偲んだ。

次に来賓の方々から、故人の思い出を語っていただいた。

大浜信泉氏は、セミナー・ハウスの構想が実現に至るきっかけとなった佐藤氏との出会いと、常に募金活動の中心であられた氏のご尽力などを語られた。

続いて野村証券会長瀬川美能留氏、アジア財団日本代表ジェームス・L・スチュアート氏、当ハウスOBの日本長期信用銀行員藤本紘氏により追悼のメッセージが述べられた。

参列者一人一人が、語られたメッセージの中に同氏の思い出をかみしめながら国立音楽大学講師・佐藤公孝氏指揮による同大イリス合唱団の美しいコーラスに耳を傾けた。合唱曲目は「追悼永生」として、憩の風、ミレーの晩鐘に寄す、『レクイエム』より楽園にて、「追悼謝恩」として、野辺にうたわん、親しき山を去り、アルプスの牧歌の六曲で、選曲は指揮者佐藤公孝氏によるものである。

コーラスの合い間に、開館二周年の講堂・図書館落成式につづいて開催した記念講演会で同氏が行った講演の一部を聞き、哀惜の情を新たにした。

最後にご令息修一氏の挨拶があって、佐藤家と関係の深い来賓が未亡人を中心にして故人の写真を中に記念撮影を行った。

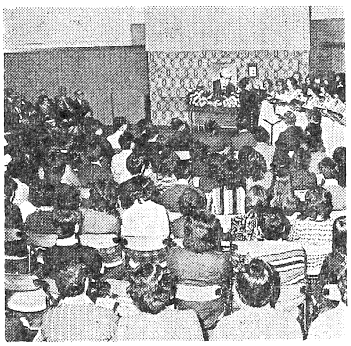
続く夕食パーティは、各大学の利用者も参加して、さしもの食堂も超満員。食堂心づくしのおでんやおにぎりに食欲をみたし、親しい会話がかわされ、なごやかな風景を現出した。飯田館長から、佐藤未亡人に、ご霊前に捧げてくださいと花束が手渡された。

また、秋の叙勲で勲一等を授与された正田建次郎理事長に、お祝いの花束が女子学生から贈呈され、プログラムに光彩を加えた。

なお、追悼の集いで、当日列席できなかった元文部大臣坂田道太氏の電報と、当初出席が予定されていたハーバード大学教授・元駐日大使E・O・ライシャワーご夫妻が健康上の理由でご来館いただけなくなったことが披露された。

なお、当日は前述の来賓のほかに次の方々が出席された。

三井銀行会長小山五郎、東レ会長安居喜造、日本育英会理事長村山松雄、ソニー専務吉井陛、元日本女子大学長上代たの、佐藤喜一郎氏元秘書安藤利亮、東京農工大学教授大野泰雄、東京大学教授岩崎代志治、亜細亜大学教授松野賢吾、文部省学生課長十文字孝夫



思い出も深し：音楽の中での追悼会

●瀬川美能留（野村証券会長）

私の学生時代をふり返って、もっとも幸せだったと思うことは、人格・学識ともに心から尊敬する教授が一、二人おられたことです。そして、世の中に出てどうやら歩き出したときに、またしても私にとって幸いなことは、心から尊敬する師を得たことです。それが佐藤喜一郎先生でした。皆様もご存知のとおり、野村の事業は明治から三井銀行によって育てられ、ことに戦後は三井の一つの会社であるような親切な待遇をしていただいたのです。

私が初めて佐藤さんにお目にかかったのは昭和20年前後ですが、当時、佐藤さんの前に行くことはとてもこわかった。と申しますのは、佐藤さんはいろいろなことを勉強しておられて、一つのきちっとした意見をもっておられた。証券界が戦後、壊滅から立ち直って今日に至っている中には、佐藤さんのご意見を私が拝借してそれをそのまま実現していったようなケースがたくさんございます。とにかくあまりはっきりした結論をいわれるので、うっかりこちらが用意なしにお目にかかるといかんだろうと、十分に勉強してからお目にかかったというようなことでございます。

財界人のトップとしてご努力されたご偉勲を偲びまして、私どもは私どもなりにできる小さなことを世の中のためにやっていかなければならないと覚悟している次第です。

●ジェームス・L・スチュアート（アジア財団日本代表）

日米協会の理事をご一緒した関係で、私は佐藤喜一郎さんによくお目にかかることになりました。会議では最初、佐藤さんはあまり発言しませんでした。このような集りは場合によって結論が出ないのですが、佐藤さんはそのような時、鋭い質問をして会議に結びをつけてくれました。大部分の場合これが佐藤さんの役割でした。

私は以前からいい日本語を知っていました。それは実力者(a man of real ability)という言葉です。しかし、私がこの言葉の意味を本当に知ったのは、佐藤さんに会ってからだと思うのです。

私のところにアメリカやアジアから、いろいろな人が訪ねてきます。時々、日本の財界の代表的人物に会いたいと頼まれることが、

大学共同セミナー委員会の陣容なる

本年度第一回委員会は、前年度末で満期退任された委員に代わる八名の新委員の顔ぶれが揃ったところで、新旧委員の歓送迎を兼ねて、10月2日、私学会館で開催された。

旧委員四名を含む二一名の先生方が出席され、まず前委員長川原栄峰早大教授より新委員の紹介が行われ、引き続いて正副委員長の選出に移った。新委員長に木村尚三郎東大助教授、副委員長には宇野重昭成蹊大教授と吉田夏彦東工大教授が、全員の賛成を得て選出された。吉田先生は昭和45、46年に同委員を勤められたが、この度は再度ご登場願い、ご協力をいただくことになったものである。

ついで今年度前半に開催された共同セミナーの実施報告のあと、後半の計画が議せられたが、新旧委員の意見交換と懇親のよい機会となった。

第二回委員会は、一七名の出席を得て、12月8日私学会館で開催された。主に昭和50年度の共同セミナーについて、実施回数、テーマなどを議したが、特に50年度は当ハウスの開館十周年に当たるので新しい形式で十周年にふさわしい企画が練られることになった。

◇昭和49年度共同セミナー委員

〔委員長〕

木村尚三郎　東京大学助教授

〔副委員長〕

宇野　重昭　成蹊大学教授

○吉田　夏彦　東京工業大学教授

〔委　員〕

徳末安伊子　日本女子大学教授

世良　正利　中央大学教授

今井　淳　武蔵大学教授

内田　祥哉　東京大学教授

岡本　剛　東京理科大学教授

柏崎利之輔　早稲田大学教授

川鍋　正敏　立教大学教授

鈴木　宗治　東京医科歯科大教授

田丸　徳善　東京大学助教授

西村　閑也　法政大学教授

淵　倫彦　東京都立大学助教授

宮下　啓三　慶応義塾大学助教授

武藤　聰雄　東京教育大学教授

山田　欣吾　一橋大学教授

○今井　宏　東京女子大学教授

○大谷　啓治　上智大学教授

○大東百合子　津田塾大学教授

○川島　重成　国際基督教大助教授

○神田　信夫　明治大学教授

○福井　重雅　早稲田大学助教授

○湯沢　雍彦　お茶の水女子大学助教授

（就任順五十音順）　○印は新任

◇昭和50年度大学共同セミナー開催予定

▼第76回　実存思想とは何か―生きることの原点をもとめて―　5月24～26日

▼第77回　一九三〇年の日本をめぐる国際環境（八大学合同ゼミ）　6月20～22日

▼第78回　芸術のたのしみ（仮題）　7月11～13日

▼第79回　機械文明と人間（新入生歓迎セミナー）10月29～31日

▼第80回　開館十周年記念セミナー　10月29日～11月2日

▼第81回　国連セミナー―国際婦人年に因んで―　11月21～23日

▼第82回　革新的伝統の追究　12月12～14日

「大学を開く」
（創立十年史・開館七年史）
刊行なる

一年がかりで編集していた記念史がやっと一月末に出来、2月にはご縁の深い方々や千人会員の皆さまに贈呈される。

〔本書の内容〕

プロローグ

第一章　知らざる径を歩む
―創立以前のこと―

第二章　夢を有形に
―法人創立以後開館まで―

第三章　よき若木若芽の育ちて
―開館から七年の歩み―

第四章　歓びの歴史を作る

エピローグ

資料―年譜・利用状況

なお本書の出版費三〇〇万円は千人会の寄付によったことをご報告し、ここに感謝いたします。

本書の頒布方法＝当ハウスで直接お買求めの場合千二百円（頒価千五百円）、郵送の場合千五百円。

↙あります。そのような時、私は三井銀行に電話してお願いすると、佐藤さんは非常によく会ってくれました。静かな暖い受入れ方で、勿論、問題なしの英語を使いまして、向こうの方にいい印象を与えました。

三年前、私のところに、タイのある大学から日本研究学科をつくりたいが、日本の民間からの助力を仰ぐことができますかという申込みがありました。そのすぐ後、私は他の会合で佐藤さんに会い、このことを話したところ、佐藤さんは私にどうするつもりかと尋ねましたので、私は経団連に持っていくつもりですと答えました。経団連はこのような教育・文化プログラムを引き受けても、メンバーの連盟や会社に廻したりして多少時間がかかりますが、この場合は一週間ぐらいのうちに、決まったからお金はいつでもという電話がありました。あとで私が調べたところでは、佐藤さんが三井グループでやってくれたことでした。

その大学から今週二人の教授が東京に来て、佐藤さんによろしく申して下さいといいました。残念ながら、これはちょっとむずかしいのですが、あの名前、あの人物を覚えていてくれたことを、私は非常にうれしく思いました。

●藤本　紘
（日本長期信用銀行員）

私は昭和40年のセミナー・ハウスの落成式で、初めて佐藤先生にお目にかかりました。その時、佐藤先生は、私には非常に遠い存在で、この方がどういう方なのか、セミナー・ハウスにとってどういう意味のある方なのか、実はよくわかっておりませんでした。その後、何回かセミナー・ハウスにやってきて、飯田先生はじめいろいろな方から、佐藤先生がどういう方かをきいておりました。

私は42年に大学を卒業し銀行に入りましたが、ちょうど30年代の高度成長期の歪みが出てきた頃で、仕事をしていても、果たして経済活動をやっていくことが意味があるのか非常に疑問に思っていました。そうした折り、42年の講堂・図書館の落成式で佐藤先生が講演され、私は短い時間でしたが、先生とお話する機会がありました。私は率直に申しまして、銀行員というのは意味があるのだろうかとお尋ねしました。その時、どのようにおっしゃったか、実ははっきり覚えておりません。その後もいろいろ悩んだり考えたり、あるいは人に相談してきたわけですが、佐藤先生の訃報を新聞で拝見した時に、私が生きたように生きればよい、銀行員は経済活動だけやるのではなくて、もっと広い活動をすることの中に生きている意味があるのではないか、ということを教えてくださったのだと、ふっと思いました。

◆千人会◆千人の同心を求めて◆善意の年輪をつくるために◆

■**現在会員は九三五名です**

大学人＝七三六名
社会人＝一九九名
（49年11月末現在）

■**新しく会員となられた方々**

〔第26回報告（申込順）〕

B　玉川大学教授　勢山秀子殿
C　東京都立大教授　小野　茂殿
C　専修大学助教授　土方　保殿
C　千葉工業大教授　関　龍夫殿
C　東京学芸大教授　石渡　毅殿
B　上智大学助教授　人見　宏殿
B　東京大学教授　北垣信行殿
C　明治学院大教授　舘　逸雄殿
C　法政大学助教授　小西正捷殿
B　国際基督教大教授　原一雄殿
A　東京経済大学教授　富塚文太郎殿
C　電気通信大学専任講師　狩野紀昭殿
B　津田塾大教授　大東百合子殿
C　専修大学教授　大島太郎殿
B　大学セミナー・ハウス職員　河田喬夫殿
B　中央大学教授　那須宗一殿
C　東京理科大学助教授　沢崎守孝殿
C　早稲田大教授　子安美知子殿
C　早稲田大学教授　大頭　仁殿
A　白梅学園短期大学教授　久保田浩殿
C　千葉大学教授　藤沢義男殿
C　安田生命　島田治夫殿
C　津田塾大助教授　馬場伸也殿
C　青山学院大教授　清水英夫殿
C　東京都立大教授　貝塚爽平殿
A　ユネスコ・アジア文化センター理事長　伊藤良二殿
B　横浜市立大教授　辻　達也殿
C　東京都立大学助教授　児玉昭太郎殿
B　文京女子短期大学教授　三村卓雄殿
C　青山学院大学専任講師　寺東寛治殿
A　専修大学教授　萩原　稔殿
C　法政大学教授　白井泰四郎殿
C　立教大学教授　野々口格三殿
C　東京外国語大学助教授　原　誠殿
B　新潟大学助教授　辻　誠殿
B　専修大学教授　湯浅光朝殿
B　九州大学学生部次長　友部　浩殿
C　明治大学教授　神田信夫殿
C　東京大学助教授　梅沢　豊殿
C　東京大学助教授　速水　慶殿
C　東京医科歯科大学教授　望月一憲殿
C　国際基督教大学助教授　横田洋三殿
B　島喜商店　藤平重雄殿
A　東京工業大教授　江藤　淳殿
C　上智大学教授　品川孝次殿
B　国際基督教大学準教授　阿久津喜弘殿
C　亜細亜大学教授　松野賢吾殿
C　朝日新聞社　岡本敏雄殿
C　相模工業大学助教授　山本尚志殿
B　三菱電機　山田昭房殿

■**会費ありがとうございます**

昭和49年9～11月（敬称略）

久保田　浩、伊藤良二、海老沢克之、三村卓雄、大東百合子、原　一雄、児玉昭太郎、中島邦男、北野弘久、片山清一、松尾　登、相良惟一、大沢綱一郎、井深淑子、若槻泰雄、小林忠義、楢林博太郎、植田捷雄、坂本義和、長松昭男、千葉正士、谷　俊治、花島重春、鞍馬菊枝、朝倉孝吉、小田切美文、加藤五六、村上陽一郎、尾形　憲、伊藤隆吉、関本昌秀、柳下綱道、柴田愛子、押田勇雄、下田　弘、関田寛雄、西村善四郎、藤永光之、武沢信一、望月昭一、増田茂樹、新井勝紘、田中庄蔵、朽津耕三、小堀桂一郎、小川圭治、中村英勝、飯野和彦、横浜　宏、堀江忠男、後藤米夫、小林　正、森口繁一、鈴木　守、長津一郎、古屋野正伍、鈴木忠義、伊能　敬、内ケ崎賞五郎、栗原照子、原　豊、稲垣　寛、末松安晴、宮川　透、平野健一郎、筑波常治、坂野観司、大須賀政夫、天利長三、森　恭三、市川惇信、影森　明、横田洋三、神田信夫、野々口格三、望月一憲、沖中重雄、加藤一郎、中島斌雄、川原栄峰、佐原六郎、松田稔子、松田武彦、戸田盛和、東　寿太郎、岩浅武雄、宇野重昭、小田中敏男、板垣与一、田村　献、野田良之、小川芳男、伏見　弘、田中弥寿雄、田端光美、杉沢新一、白井　常、出居　茂、森岡清美、石川吉右衛門、鶴岡義一、重田信一、神山妙子、小林善彦、江尻美穂子、安達　健、永井克孝、松延　博、清水英夫、満尾寿男、貝塚爽平、助　盛晴、堀　信一、深沢　宏、赤堀四郎、坂本清、多賀義高、大竹　誠、大村政男、山崎真秀、藤永　保、白浜謙一、小田切松義、今井　淳、佐々木克巳、岡野行秀、木村富夫、北沢佐雄、飯吉厚夫、武藤英輔、安達義明、田中昭二、森川和久、小堀　巌、小河原正巳、宇都木章、鈴木　喬、加藤栄一、永沢越郎、大友昌子、石川正一、磯部浩一、森井　真、泉　治典、角倉一朗、宮崎繁樹、高橋三郎、福田隆義、宇都栄子、藤林宏一、奥　繁光、岡島真理、川鍋正敏、飯田八千代、布施濤雄、高橋浩爾、飯田　恵、松村康平、バッケス・ジャン、新井益太郎、江上不二夫、木村久男、相馬勝夫、松本樺太、金田品二、山本　登、森田信義、高橋泰蔵、前田陽一、三輪光雄、山本大二郎、田中外次、岡本定次、江副敏生、馬場明男、宮本　勉、森　繁雄、宇野義方、示村悦二郎、安藤瑞夫、松元文子、外池孝雄、飯野利夫、勝木保次、山下幸夫、飯田　栄、吉武泰水、細田友雄、羽根田　操、斎川　仁、山口　喬、小川捷之、井門富二夫、飯島宗享、内田章伍、吉沢英子、坂口順治、笹島恒輔、田村皖司、小野　茂、戸塚元吉、大須賀節雄、泰本　融、衛藤瀋吉、安味貞正、弓削三男、玉虫文一、武者小路公秀、清水護、谷　重雄、水野伝一、関　龍夫、石川　明

■**寄付金報告**

（昭和49年9月～11月）

ご支援を感謝して拝受いたしました。

二、〇〇〇円　東京教育大学堀洋道ゼミ殿
一〇、〇〇〇円　留学センター殿
一〇、〇〇〇円　宮崎繁樹殿
五、〇〇〇円　東京家政大児童学科宮崎照子殿
五、〇〇〇円　日本女子大附属高校殿
八、〇〇〇円　岡崎　正殿
五、〇〇〇円　松本樺太殿
二、〇〇〇円　品川孝次殿
三、〇〇〇円　椿　弘次殿
五、〇〇〇円　瀬在良男殿

《植樹基金》

一〇、〇〇〇円　立正大学中村孝之ゼミ殿
六、八四〇円　第72回共同セミナー殿
一八、九三〇円　第73回共同セミナー殿

《ピアノ寄付金》

三、〇一〇円　ピアノ購入募金箱
三、〇〇〇円　弓町本郷教会殿
三〇、〇〇〇円　㈱スリーボンド殿

《現物寄付》

カルミヤの木一本　国立音大イタリア語研究会殿

会員校に成城大学・千葉商科大学を迎える

――大学の連帯さらにひろがる――

昭和49年12月11日の理事会は、前記二大学を協力会員校に迎えることを決定した。これで会員校は四二大学となった。成城を加えて旧七年制高校の四大学が加入したので、今後は教育活動、わけてもカリキュラムの上に創意と工夫を講ぜられ、理想的な四大学協力を実現してほしいものである。一つの大学が綜合大学になるのでなく、各大学が特色ある学部を持ちよることによっての綜合化が大学の合理化につらなるからである。米国の五大学協力はその好例である。

国立の千葉大学より一足先きに私立の千葉商科大学が加入され、千葉県に会員校が誕生したことを歓迎したい。私学の潜在的活力に期待したい。

小竹・野口両教授の感想の中にセミナー・ハウスを支えてくれる大学人の連帯感を知り心強い。

●入会を喜ぶ――

千葉商科大学教授　小竹豊治

千葉商科大学は、昨年12月から「大学セミナー・ハウス」の会員校となった。この加入は、二つの意味で大変喜ばしい。第一にこれは、千葉商科大学の今後の発展にとって、きわめて有意義なものがあるからである。

ご存知の方もあると思うが、本大学は、戦前には巣鴨高等商業学校と称した。戦災で一切を烏有に帰し、戦後に市川市国府台に移って大学名を改称した。「千葉」といっても、本学の所在地は、都心の東京駅からすれば、江戸川向いの僅々一八分間の近距離にある。本学は戦後、幾多の苦難を経たが、今や将来への発展を深く志している。このような、わが大学に学ぶ七千余名の学生諸君が、指導教師と寝食を共にして勉学し、これを通じて相互の友情を強めるためにこのセミナー・ハウスの施設を利用し得ることになったのは、一教師として喜びに堪えない。

しかしこの喜びは、今回の加入が「大学セミナー・ハウス」の発展の一助にもなると思われるので、二重の喜びである。筆者は、このセミナー・ハウスの創設以後、昭和47年3月に停年退職するまで、慶応義塾大学商学部のわが所属ゼミナール学生と一緒に、幾度かこの施設を利用した。学生達にとっては、緑の高台にある「大学セミナー・ハウス」での勉学の経験が、忘れ難い深い印象となったのである。筆者も、このようなセミナー・ハウスを企画し、幾多の困難を克服して、これを実現し、さらにその発展に努力されている館長飯田宗一郎氏の熱情には、ここを訪れるたびに感動させられている。現在、会員校は四二校に達したと報告されている。まさに飯田館長の理想が、着々と実現しつつある。だがこのセミナー・ハウスは、さらに一層、目標を高めて、日本の大学と学生の研究・教育に益するところがなければならない。この意味で、千葉商科大学の加入が「大学セミナー・ハウス」の発展に資するものがあることを、心から喜びとしたい。

●私とセミナー・ハウス

成城大学助教授　野口武徳

昭和47年の6月の、大学共同セミナーのテーマは「日本人の再発見」であった。和歌森太郎教授をまとめ役に、神島二郎、土居健郎、松原治郎、小堀桂一郎、オーテス・ケーリなどの有名教授陣の末席を私が汚し、一つのセクションを担当した。「日本の若者の性の伝統」をテーマに全国から集まった熱心な学生諸君と一緒に三日間合宿した。ゼミはかなりのハードワーク、それに食事その他の規律もきびしいので、ゼミを終えたあと、八王子でみんなと一緒に飲んだビールは、ことのほかおいしかった。合宿とか、夜の語らいとか現代の大学には体験する機会の少な過ぎるものを与えてくれるのがセミナー・ハウスと言える。その時のゼミの概要はまとめられて出版され（弘文堂）、その印税を私達はセミナー・ハウス十周年を記念して寄付した。

セミナーでの学生諸君との対話も面白かったが、ゼミのあと、夜毎飯田理事の接待で諸先生方と話し合ったこともまた忘れられない。それぞれ、その道の権威のお話で、私はおおいに得ることがあった。今度私の勤務先、成城大学が会員校に加入することになり、私個人のゼミなどでも使用できると聞いて、喜びにたえない。学習院、武蔵、成蹊、成城と旧制私立七年制高校で作る四大学祭があるが、こういう一時的なお祭りでなく、今後は共同ゼミや単位交換などへと発展してゆけるきっかけにもなるのではなかろうか。古い大学の概念や枠をセミナー・ハウスは打破しうるのではないか。澄んだ空気、樹々のたたずまい、八王子の山は美しい。

■寄贈図書

昭和49年6～9月

「文明の起源」　木村隆一殿
「八王子市長期総合計画」　八王子市役所殿
「トインビー研究」1号、「聖心女子大学キリスト教文化研究所紀要」1～2号　吉沢五郎殿
「神奈川大学人文学研究所報」7号　山本新殿
「早稲田フォーラム」5～6号　早稲田大学広報課殿
「総合教育研究室年報」一九七三　関西学院大学総合教育研究室殿
「社会学論叢」60号、「建築家のための数学」「建築構造学入門」「中空スラブの設計」　松井源吾殿
「大江文庫目録」　東京家政学院大学殿
「国際交流」2　国際交流基金殿
「紀要」創刊号　都立片倉高等学校殿
「透谷と秋山国三郎」小沢勝美殿
「町田市史」上巻　町田市役所殿
「世界詩集」　藤富保男殿
「自主外交の幻相」　山本満殿
「彷徨山との出会い」　里見昭二郎殿
「応用数学の漫歩」「応用数学の散歩」　鬼頭史城殿
「Energy」38号　エッソ・スタンダード広報課殿
「日本近代劇・一幕物集」　丹羽文夫殿
「歴史と未来」2号　中嶋嶺雄殿
「現代日本における伝統文化」　ユネスコ・アジア文化センター殿
「政治経済史学」一〇〇号　日本政治経済史学研究所殿
「社会主義とファシズム」　白井久和殿
「相続税法」　北野弘久殿

第71回大学共同セミナー

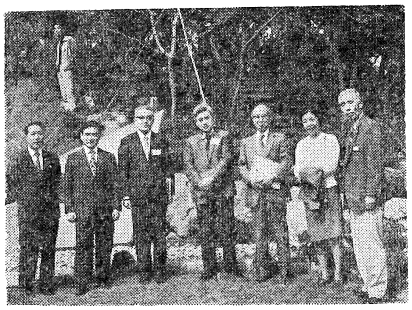
主題——人類の未来と国連

期日——昭和49年9月27～29日

岡崎　陽一氏

《全体講義》
◇人類の未来と国連
東京大学教授　坂本　義和氏
◇第三次国連海洋法会議の成果と課題
東北大学教授　小田　滋氏

《セクション演習》
A　国連の安全保障の可能性と限界
東京大学教授　高野　雄一氏
B　個人の保護と国家および国際連合
広島女子大教授　小寺初世子氏
C　国連世界人口会議の成果と今後の課題
厚生省人口問題研究所長　黒田　俊夫氏
同研究所人口移動科長


左から東，宮崎，山岡，小田，黒田，小寺，飯田の各氏

D　資源問題
早稲田大学助教授　西川　潤氏
早稲田大学教授　山岡喜久男氏
E　海洋法秩序と国家領域観の変化
津田塾大学教授　東　寿太郎氏
（運営委員）

《運営委員》
明治大学教授　宮崎　繁樹氏

《参加学生》87名（内女子32名）
津田塾（14）、東大（12）、慶大（8）、ICU、早大（各7）、一橋大（6）、明大（4）、東京外大、創価大（各3）、埼玉大、東京商船大、東京学芸大、横浜市立大、中大、明学大、日大、立大（各2）、広島大、東工大、青学大、上智大、学習院大、独協大、東海大（各1）計24大学

▼▲

今回は、昨年度実施された第64回共同セミナー「新時代を迎える国連」に次いで、二度目の「国連セミナー」である。

前回の指導教授や国連広報センターから、ぜひこの種のセミナーを毎年継続して欲しいという要望が出され、共同セミナー委員会も全面的にこれを了承し、国連の各年のテーマを素材に毎年開催することになったものである。

昨今ますますグローバルな規模で解決が迫られている人類社会の未来にかかわる諸問題について、より具体的な検討が加えられるよう、今回は最近の国連関係の諸会議の成果を積極的に採り入れる特別の配慮がなされた。

講師陣には、国連訓練調査研究所で一年八ヵ月にわたっての研究後、帰国されたばかりの坂本先生、カラカスでの第三次国連海洋法会議に日本代表として出席された小田先生をお迎えし、ブカレストでの国連世界人口会議に参加されたばかりの黒田先生が演習を担当されるなど、国連が当面する課題と実際の活動が生々しく紹介されたセミナーであった。

二回のセミナーに見られた学生の積極的参加、運営・指導に当たられた先生方の連帯、さらに社会的な要望を背景に、「国連セミナー」は当ハウスの年中行事として定着しようとしている。

なお、今回のセミナーの第一日目の模様と、坂本先生の全体講義の要旨は、毎日新聞学芸欄（49年10月5日付夕刊）で紹介された。

「国連セミナー」を運営して

明治大学教授　宮崎　繁樹

昨年、共同セミナー委員として席を連ねた横田洋三さんが世界銀行に二年ほど行かれるというので、二回目の「国連セミナー」を、津田塾大学の東寿太郎さんとお世話することになった。といっても、そのお膳立てには、高野雄一先生をはじめ、横田さん、東京外国語大の斉藤恵彦さん、セミナー・ハウスの方々が加わって下さり、昨年同様国連広報センターには、資料の提供で格別のご協力を頂いた。

私は、今回は裏方のつもりだったが、高野先生が都合で中座されたあと、安全保障のセクションに参加し、熱心な学生諸君の討論を傾聴することができた。

ベッドにもぐり込もうと思っていたら、「トントントン」とドアをノックする音がした。ウイともノンともとれるような返事をしてベッドにひっくり返っていたら重ねてお迎えがきた。

教師館の会議室に行ってみると斉藤さんを取り巻いて学生諸君が熱心に話し合っている様子。「こりゃ、今夜は一睡も出来ないかもしれんぞ」と観念して着席、自由討論の仲間入りをした。しかし、紳士（淑女）的な学生諸君は十二時前に釈放してくれ、快い眠りにつく。

朝の空気はまた格別、黒田先生は、平素朝食抜きなのに、思わず朝食を平げましたと話された程。山岡・西川両先生ご指導の資源問題も、まだセミナー・ハウスの食糧事情までには及んでいない模様。

運営委員の東さんは、裏方から司会、海洋法から安全保障と八面六臂のご活躍で機能的にセミナーの進行にあたられたのには感服。

最後のサヨナラ・パーティで、思いがけず素晴しい花束を頂戴したのは、ただただ感激。

横田さんが本紙33号に書かれているように、毎月10月24日の国連デー前後にこの八王子「国連セミナー」が開かれると良いと思う。

第72回大学共同セミナー

主題——人間と言語

期日——昭和49年10月11～13日

慶応大学言語文化研究所助手　西山　佑司氏

《全体講義》
◇言語変化と人間の意志
東京大学教授　柴田　武氏

《ゲスト講義》
◇言語の意味と言語外の意味

《セクション演習》
A　言語生活の変容—言語の社会調査—

国立国語研究所
言語行動研究部長　野元菊雄氏
B「人間にとって言語とは何か」をめぐって
早稲田大学講師　小笠原林樹氏
C言語の独自性・相対性・普遍性
東京都立大学助教授　光延明洋氏
Dことばと文化
慶応義塾大学教授　鈴木孝夫氏
（運営委員長）

≪参加学生≫84名（内女子53名）
上智大（12）、津田塾大（10）、早稲田大、ＩＣＵ（各9）、東京外大、東大、日女大（各5）、明学大（4）、立大（3）、専修大（3）都立大、青学大、慶大、独協大（各2）、一橋大、東京学芸大、東京芸大、明大、日大、立正女大、東京女大、国立音大、成蹊大、フェリス女学院大、共立女大（各1）計25大学

◆◆

去る昭和49年2月に同じテーマで開催された第65回共同セミナーは、最近とみに関心が高まりつつある言語をとり上げた初めてのセミナーであったが、予想どおり学生の反響が大きく、定員を超える多数の申込みが殺到した。その際参加できなかった学生の熱望に応えるため、再度の実施となったものであるが、今回も確保できうる宿舎の収容人数に達したところで受付を打ち切らざるを得ないほど多数の応募があった。

前回同様、鈴木先生が企画・運営・指導にその卓抜な手腕を発揮された。この二回にわたる「言語セミナー」の成功は、鈴木先生のご尽力に負うところが多い。野元・小笠原両先生が前回に引き続き指導に当たられたほか、光延先生が新たに加わられた。

方言研究の権威として知られる柴田先生は、裏日本の方言の調査を素材に、人間の意志が言語の変化にどう働くかを、またＭＩＴで研究、帰国されたばかりの西山先生は最新の言語学の理論を駆使して言語内および言語外の意味について講義をされ、参加者に多くの反響をよんだ。

一、二回とも参加者の専攻分野が極めて多様であったこと、今回はブラジル、インドネシア、インドからの留学生の積極的な参加があったことが特筆されよう。

今後の「言語」に関するセミナーの方向として、〝国際交流における言語の問題〟をテーマに、日本語や英語を取り上げ、外国人も交えた小規模なセミナーを試みてはどうか、という提言が鈴木先生より寄せられている。次の企画が待たれる。

共同セミナーならではの醍醐味

栗原和彦

曲りなりにもフィールドへ出て言語調査らしきことを経験した僕にとって、さらに「調査」ということを真剣に考えている僕にとって、国立国語研究所での言語調査に基づいたこのゼミは、大変興味深いものだった。野元先生の立場、国語研の立場、さらにためらいながら一般化するなら言語学者の立場が多少なりとも見えたからである。

僕のセクションは実に異色なメンバーで構成されていた。専攻は国語学、英文学、言語学、法学、医学、文化人類学、心理学、コミュニケーション学など多岐にわたり、先生の要領を得たご指導のもとにそれぞれのアプローチで素晴しいディスカッションを創り上げた。これにはブラジルの人、ドイツの人が一緒に参加していたことも、大きな刺激になったのである。

わずか二泊三日のセミナーであったが、このような雰囲気は他の場所では味わえないものであったし、そこで何人かの友人や先生方と知りあえたこともこのセミナーの成果であったと思っている。

（国際基督教大学語学科二年）

あいさつの意味

慶応義塾大学教授　鈴木孝夫

セミナー・ハウスの飯田館長は学生たちに対して、「お互いに言葉をかけよう、あいさつをしよう」とよくいわれる。「お早よう」でもよいし「ヤア」でもよい。とにかくセミナー・ハウスの敷地内で人に会ったら、ちょっとした言葉をかけようという、飯田氏の提案に、私は全面的に賛成である。

社会が自由になるにつれて、生活に折目をつけていた、いろいろな形式はだんだんと姿を消して行く傾向にあることは事実である。そこで形式ばったこと、つまり実質を伴わない伝統や習慣にあまりこだわらないことが自由人にふさわしい、解放された生き方だと思われるようになる。そこで若い人の中には、あいさつなんて意味のない、ただの因習的形式にすぎないと考えて、家の中で親に、「お早よう」もいわず、外出から戻っても「ただ今」ともいわない傾向が見られるようである。だがこの考えは正しくないのである。それは、あいさつは単なる形式でも習慣でもなく、生物としての人間性に深く根ざした、重要な行動様式の一つだからなのだ。

人間を含めた各種の動物の習性を新しい角度から研究する比較習性学（ethology）と呼ばれる学問があるが、その中で、猿は勿論のこと、一般の哺乳類、鳥類にも、また魚類にさえも、「あいさつ」とまさに呼べる、各動物の種に固有な行動のパターンが存在することが明らかにされている。

一般に高等な生物は、異種はいうまでもなく、同種の他の個体に接近する場合、心理的な緊張が高まるものなのである。相手の出方が予測出来ないための不安、恐怖が生まれる。それと同時に接近したい欲望もある。このような複雑な心理的な動揺を解消させ、安心して接近出来るために、動物は実に種々様々なあいさつ行動を、種の長い歴史の中で作り上げて来ている。

路上で二匹の犬が出会った時、お互いに嗅ぎ合ったり、飛び跳ねて後ずさりしたり、なかなか一気に安定したつきあいを始めないことは誰でも経験していることであろう。

人間は、他の人間と出会ったときの心理的不安を、あいさつという、言葉かわしで解消する方法を、種の発展段階で作り上げて来たのである。治安の良い大都会の中で、ことに明るい昼間に、見知らぬ他人に出会ったからといって、不安を感じるような人はいないだろう。だが暗い夜道で他人とすれちがう時、淋しい山道で誰かと出会う時など、多くの人が何かしらの不安を覚えた経験があると思う。「今晩は」とか「今日は」という、一見具体的な意味のない軽いことばをかけることは、相手に対して敵意のないこと、おなじ仲間だということを示す重要な機能をはたしているのだ。

（第72回共同セミナー指導教授）

第4回国際学生セミナー

主題――アジアの平和と開発
新しいアジア像を求めて

期日――昭和49年12月12～15日

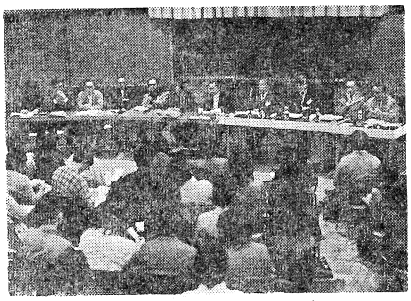
《ゲスト講演》
◇アジア諸社会の特質と共通性
東京大学教授　中根千枝氏

《講演とセクション演習》
A　東南アジア―歴史と風土と心理―
京都精華短期大学学長　深作光貞氏
B　東南アジア社会と発展
東京外国語大教授　田中忠治氏
C　アジア諸国と日本との経済関係
名古屋大学助教授　飯田経夫氏
（演習補佐）
名古屋大修士課程　伊藤正憲氏
D　アジアの国際関係―アジア・中国・日本―
東京都立大助教授　岡部達味氏
E　アジア主義の功罪―アグラリア的発想と欧米流帝国主義の間―
上智大学教授　三輪公忠氏

《シンポジウム》
◇アジアを考える
ブリタ・ブアナ特派員　アリフィン・ベイ氏
日豪経済合同委員会奨学生　ウォレン・リード氏
上智大学教授　川田侃氏
東京外国語大学助教授　中嶋嶺雄氏

《運営委員》
東大学生課長補佐　宮川清氏
津田塾大助教授　江尻美穂子氏
京都大留学生掛長　浦上要三氏
早稲田大外事課長　山代昌希氏

《参加学生》89名（内女子28名）
a　国籍別（計12ヵ国）
日本(62)、ベトナム(5)、中国、タイ（各4）、韓国、インドネシア（各3）、香港、フィリピン（各2）、ブラジル、アメリカ合衆国、フランス、オーストリア（各1）
b　大学別（計28校）
早大（14）、津田塾大（11）、東外大、上智大（各8）、慶大、京大（各5）、一橋大（4）、立大、名大、東京農工大（各3）、日女大、東大、ICU、広島大、東京工学院（各2）、青学大、明学大、東女大、武蔵大、東教大、大阪外大、神戸大、山口大、東北大、京都工芸繊維大、帝塚山学院大、日体大、立教女短大、大阪府大、大阪市大（各1）


シンポジウムでアジアの未来を探る

◆◆

昭和46年度より年一回、日本万国博記念協会の援助を仰ぐことによって実施してきた国際学生セミナーは、「アジアの平和と開発」をメインテーマに掲げ、副題に「日本の技術―その歴史的社会的性格」「新しい国際環境のなかで」「日本を考える」を取り上げながら、それぞれの成果をあげて、課題を引き継いできたが、アジア諸国に対する一般の関心が著しく高まってきている今日の状況にかんがみ、所期の目的は十分達せられたと考えられる。前述の万博基金の補助は今回で終りになることもあって、このシリーズはこれをもって完結となった。

最終回にふさわしく主題に「新しいアジア像を求めて」を選び、幸いにも運営委員長には過去二回の指導に当たってこられた中嶋嶺雄先生にご尽力をいただくことによって、各専門分野で独自なアジア研究をもって知られる方々を講師陣に配することができた。また今回も留学生の募集段階から会期中の生活指導に至るまで、JAFSA（外国人留学生問題研究会）の方々にご協力をいただいた。

参加学生の構成は別記のとおりであるが、留学生募集には特に力を注いだ結果、仙台、山口を含む各地から熱心な留学生の参加を見ることができた。日本人学生の反響はいつもながら大きく、定員の二倍を越える応募者があった。

三泊四日の日程のうち、三日目の土曜日の午後はオープンハウスとし、ゲスト講演とシンポジウムが公開された。国際学生セミナーのOB・OGや、今回参加できなかった学生などが招待され、講堂は満員の聴衆でうまった。小春日和に恵まれたようこそ広場では、なごやかな交歓風景が展開された。シンポジウムの発題者の一人、W・リード君は前回の、また飛び入りでシンポジウムに加わった申熙錫君（韓国）は初回から前回までの参加者であり、国際学生セミナーで育った交流の芽がその後も保たれていることを示した。

次頁の参加者の感想にも見られるように、日本人学生にとっていかに自己の視点を転換し、他の国の人々の立場に立つことができるかを体験する場として、国際学生セミナーの意義は大きく、新しい形で今後も継続されることを望みたい。

国際学生セミナーの一つの到達
――運営委員長としての「感想」から――

東京外国語大学助教授　中嶋嶺雄

今回のセミナーでは、日本の経済進出やエコノミック・アニマルぶりに対する通俗的な批判や反省、いわゆる贖罪論や懺悔論、援助の量や質についての政策技術的な議論、偽善者ぶった経済開発論や経済協力論といった次元を越えて、アジアの切実な諸現実を一方にふまえながらも、アジアに対する新しい文明観・価値観の探究といった問題、アジア諸国の内在的諸要因への厳しくも冷静な診断といった問題にまで討論が深まっていった。

もとより「新しいアジア像を求めて In Search of a New Self-identity as Asians」という今回のテーマに関しての統一的な認識や方向性がそこで発見されたわけではない。その点は、依然として個々バラバラに多様であり、甲論乙駁するものであったろう。にもかかわらず、世界のなかのアジアと日本のかかわりあいの大いさ、その重さといったものを自覚しつつ、明日のアジアをともに構築してゆこうとする者の精神の糧として、このささやかなセミナーがもたらした諸体験は、やはり貴重なものであったし、やがて目に見えない果実を、日本の、そしてアジアの各地で結びゆくであろう。

こうして国際学生セミナーは、ここにようやく一つの到達点を見出すことができたのではなかろうか。

おとなりさん（韓国）

朴　仁鎬

私達が立っている所がアジアでありながら、あまりにもアジアを論じる場が少ないのは、一見お隣りを度外視した遠視眼的錯覚ではないかという感じがあっただけに、今度のセミナーはその期待が大きかった。

まず素晴しいセミナー・ハウスの環境と、三泊四日の生活は、私にアジア人としての意識を持たせ、その認識をより着実なものにして行くことを助けてくれた。

私のセクションは、アジア諸国と日本との経済関係という極めて反日感情の元になる多くの問題を抱えていた。ことに援助や日本企業の進出のあり方については、私達留学生一同、援助される立場として野党的な攻撃を投げかけ、日本の学生は非常に困っただろう。

白熱したセクション演習

相手国を論じる時、木一本を見て森全体を論じるということから生じる偏見は、アジアの連帯のためには最も阻害要素になる。

私達は新しいアジア像を求めるためには、何より自分の回りの国から仲よくする「おとなりさん」精神から始まらなければならない。これは私達若い世代の歴史的な使命感ともいえるだろう。

「知る」ということの意味

藤本　恭子

セミナーが終ってもう三日経ちます。しかし今なお私の中に、セミナー最終日に私を包んでいた重苦しい、罪悪感にも似た思いが滞っています。この思いは、私が軽率にも国際学生セミナーを、本質的には授業の延長としか考えていなかったことに始まります。以前マスコミを賑わした、あの日本人の失うものなくして利益を求めようとする姿と何らかわるものでなかったことを、とても恥ずかしく思います。ある留学生が、「日本の教育には、価値の転換ということはないんだね」といっていましたが、お互いを知るために、アジアを知るために、自分を抜け出す一歩の情熱なくしては、何も本当に知ることができないのではないだろうか。そして、最後の全体討議の中でベルナード君がいっていた、国際関係における社会的責任を、私達は本当に身につけているかどうか、日常生活においてさえ怪しいのではなかろうか。

私の罪悪感が、実は何も知ろうとはしなかったこと、何も解決しようとはしなかったことからきているとすれば、この思いを礎に、これからの疑問に個人レベルからの一歩を踏み出すことが、アジアの国際関係の中で、前進的一歩を歩み始めることになるのではないかと思うこの頃です。

（津田塾大学国際関係学科三年）

第73回大学共同セミナー

《開館九周年記念》

主題――東洋と日本

期日――昭和49年11月8～10日

《全体講義とシンポジウム》

◇中国文化と日本
東京大学教授　山井　湧氏

◇仏教と日本
国学院大学教授　三枝　充悳氏（運営委員）

◇日本思想の特徴
大阪大学教授　湯浅　泰雄氏

《主題講演》

――故佐藤喜一郎氏に捧ぐ――
国際基督教大学教授　山本　達郎氏

《セクション演習》

A　古代日本の国際環境
お茶の水女子大学教授　青木　和夫氏

B　日本人の中国古代史像
学習院大学教授　小倉　芳彦氏

C　中国思想の日本的展開――近世儒教思想をめぐって
横浜国立大学助教授　子安　宣邦氏

D　日本における感情観――中国批判の型を通して――
日本人の仏教的真理観
東京大学助手　横山　紘一氏

E

《運営委員》

武蔵大学教授　今井　淳氏

《参加学生》77名（内女子39名）
武蔵大（14）、慶大（11）、ICU（7）、明学大（5）、早大、一橋大（各4）、上智大、東洋大（各3）、東京医歯大、横浜国大、中大、立大、日女大、国学院大（各2）、成蹊大、日大、青学大、津田塾大、東北大、千葉大、東海大、独協大、聖心女大、フェリス女学院大、実践女大、立正大、愛知学院大、女子聖学院短大（各1）計28大学

▼▲

本年は当ハウスの開館九周年に当たることから、今回は記念セミナーとして特に企画されたものである。

現在の国際的な状況のなかで、自らの進路を問い直すことの必要に迫られている日本人が、歴史的、文化的あるいは経済的に密接な関係にある東洋のなかでどのような位置にあるかを探り、自らの思想・文化の源流をたずねることによって日本をより広く、より深く知ろうとするものである。

セミナーは、山井、三枝、湯浅の三先生の全体講義を基調にすえ、続いて三先生によるシンポジウムを導入することによって、初日から活発な討論・学習が行われた。特に注目されたのは、参加学生の間に仏教に対する深い関心がうかがえたことである。

二日目の午後には、故佐藤喜一郎氏追悼記念行事がプログラムに組み込まれたが、セミナーの導入部分によって、いわば追悼への〝心の準備〟ができたわけである。故人に捧げられた山本先生の主題講演は、日本がアジアを通して世界に生きる道を示唆し、参列者に深い感銘を与え、追悼の集いでは、当ハウスの恩人、佐藤氏に対する感謝と友情をこめた感話が来賓の方々から述べられたが、セミナーの思索にも即し大変有意義であったという感想が参加学生のアンケートに多く記されていた。

この度の意欲的な企画は、過去幾度も共同セミナーの指導・運営に当たってこられた三枝・今井両先生の心くばりと、それに応えた各先生方の熱意が一体となって、期待どおりの成果を収めることができた。

●業務通信

台風一六号の影響による本館前のがけ崩れ復旧工事は、三ヵ月を要して行われ、この間、大型ダンプの出入りによる騒音や車の移動、駐車などで、利用者の方々には大変ご迷惑をおかけした。12月初旬には工事も完了し、見違えるように斜面は整備され面目を一新したが、補修に要する約一、三〇〇万円は予算外の大きな支出であるため、年度末のやり繰りは大変厳しいようである。しかし、今まで懸案であったいろは坂中腹の駐車場用地の整備作業が並行して行われることとなり、駐車台数が一段と拡大され、ひと安心である。

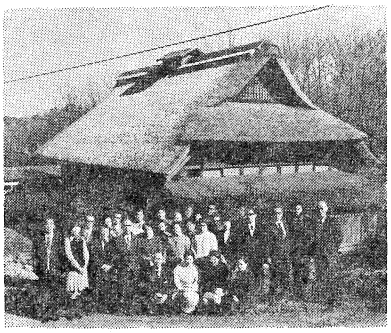
例年、10月は一般社会人の利用率が高くなるが、本年はさほどの伸びを見せないのは、不況の影響であろうか。暖房費は、度重なる重油の値上げにより、当初の一五〇円ではとても苦しくなった。今冬は止むを得ず二〇〇円に値上げすることとなり、利用者の方々のご協力を仰ぐこととなったのは、大変心苦しいことである。

11月は交通機関のストが相次ぎ利用者が若干減少したが、それでも学会、教育団体の利用が多かった。

12月は早稲田大学の利用が特に目立った。利用件数一三を数え、さながら連日、早稲田のゼミをお迎えしているような観があった。ほとんどが一泊二日の短期滞在であったが、卒論、修論の中間発表が利用目的の半数にのぼり、熱心な討論が繰り広げられた様子で、セミナー室の灯は深夜まで消えなかった。

この秋は、新しい常連が誕生した。味の素の女子社員研修がそれで、毎月一回、この丘を訪れる。彼女たちは毎回、研修開会時の館長の講話を楽しみにしている。多忙ではあったが、館長は12月も時間をさいて彼女たちを歓迎した。いくらかでも研修のプラスになれば、これも当ハウス利用の副産物ということになるだろう。

七四年の仕事納めは28日(土)。27日から28日にかけての利用者は七グループ、一八三人という極めて盛況のうちに、無事、年を越すことができたが、幸か不幸か人数が多いため、予定されていたもちつきは中止となった。最終日28日の昼食会には、食堂が年越しのそばを供され、来るべき年の前途を祈って、全員が〝ほたるの光〟を合唱した。旧年中ご利用くださった皆さまに厚く感謝申しあげ、新しい年も、皆さまのご来館を職員一同心からお待ちいたします。



職員新年会――多摩の民家遠来荘の前で。遠来荘は5月末開館予定の日本の美かやぶき屋根の家屋で、茶道・華道・謡曲などのクラブ活動に利用できる。

●利用状況

＊＝同月2回利用
＊＊＝同月3回利用
＊＊＊＝同月4回利用

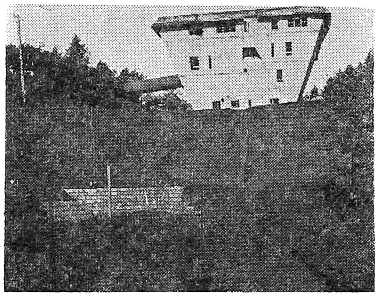
▼9月

成蹊大学教授　武田　昌輔
日本女子大学教授　岡本　栄一
学習院大学教授　荒井　良雄
学習院大学教授　渥美　昭夫
東京都立大学教授　＊桐谷　維
東京教育大学講師　堀　洋道
学習院大学教授　児玉　久雄
東京女子大学講師　村松　安子
横浜国立大学教授　本間要一郎
東京女子大学講師　山手　茂
学習院大学教授　玉野井昌夫
慶応義塾大学教授　澤本　孝久
横浜国立大学教授　工藤　英明
東京経済大学教授　吉村　寿
お茶の水女子大助教授　清水　碩
慶応義塾大学教授　小川　隆
日本女子大学助教授　宮村　光重
東京大学助教授　木村尚三郎
東京都立大学助教授　針生　誠吉
早稲田大学教授　浅井　邦二
中央大学講師　木下　徳明
明治学院大学教授　竹内　真一
一橋大学講師　依光　正哲
共立女子大学（リーダーシップセミナー）学生部課長　平岡　元長
津田塾大学教授　大東百合子
明治学院大学助教授　橋本　茂
横浜国立大学助教授　日浦　政元
成蹊大学教授　朝倉　孝吉
津田塾大学講師　加藤春恵子
津田塾大学助教授　千葉　修司
成蹊大学教授　佐々木昌義
中央大学教授　三橋　文明
青山学院大学教授　天利　長三
立教大学教授　塚田　理
青山学院大学教授　神山　妙子
一橋大学教授　地田　知平
東京大学教授　山本　俊一
早稲田大学講師　北野　弘久
東京工業大学教授　江頭　淳夫
立教大学教授　清水　敏彦
東京経済大学助教授　田坂　元
東京経済大学講師　劉　逌慶
慶応義塾大学教授　檜谷　昭彦
法政大学教授　乾　孝
明治学院大学教授　神保　信一
立教大学助教授　岡本　伸元
東京学芸大学教授　角尾　稔
法政大学教授　野田　正穂
明治学院大学講師　松島　浄
東京学芸大学助教授　井上　尚美
東京大学教授　斎藤　真
東京学芸大学助教授　新井秀一郎
明治大学助手　比護　隆界
東京家政大学講師　阿部　明子
東京都立大学教授　東　洋一
明治大学教授　浅田　毅衛
明治学院大学教授　増田　茂樹
東京都立大学教授　鈴木　二郎
上智大学講師　宇多　文雄
学習院大学教授　岡本　哲治
コルゲート大教授　G・ボールス
青山学院大学日本文学科有志
大妻女子大学学生有志グループ
神奈川大学講師　岡　正信
国立音楽大学講師　増山　暁子
立正大学助教授　中村　孝元
横浜市立大学教授　越智　昇
国士館大学教授　綾井九州彦
東海大学助教授　渡辺　幸洪
埼玉大学教授　林　進
北海道デザイン研究所　中鉢　令児
東京キリスト伝道館
ライフサービス研究所
公立保育研究会
地方自治センター
国立教会
中渋谷教会
弓町本郷教会
職業訓練大学校
第71回大学共同セミナー　後藤昌次郎
刑事法研究会
伊勢丹労働組合
三協能率
フジタ工業
読売情報開発センター
構造計画研究所
〔個人利用〕
横浜国大環境科学センター　平林　国男
沖縄県浦添市役所　銘苅　文吉

▼10月

武蔵大学教授　横山　定雄
東京女子大学教授　岩間　徹

立教大学教授　松崎　仁
東京都立大学助教授　鶴田　忠彦
立教大学教授　三宅　義夫
法政大学教授　芝田　進午
日本大学助教授　向坂　寛
明治学院大学教授　神保　信一
明治学院大学教授　宮崎　道弘
日本女子大学教授　上村　悦子
順天堂大学教授　小酒井　望
法政大学教授　内山　尚三
東京都立大学助教授　小田中聡樹
東京理科大学助手　荒川　正幸
法政大学教授　菰渕　鎮雄
法政大学教授　原　薫
学習院大学教授　玉野井昌夫
東京都立大学教授　大羽　滋
立教大学教授　茂木　虎雄
東京医科歯科大教授　望月　健夫
日本大学助教授　阿部　竹松
大妻女子大学講師　河野　武
中央大学教授　稲生典太郎
専修大学教授　*萩原　稔
東京大学教授　大田　堯
東京大学助教授　立花　一雄
東京大学教授　田中　昭二


土砂崩れ修復成る

東京工業大学助教授　古田　勝久
東京大学助教授　板垣　雄三
一橋大学助教授　諏訪　功
専修大学助教授　八田　知成
学習院大学教授　荒井　良雄
東京都立大学教授　林　栄夫
東京大学助教授　平川　祐弘
慶応義塾大学教授　十時　厳周
明治学院大学教授　竹内　真一
東洋大学教授　奥　幸雄
早稲田大学助教授　諏訪　貞夫
立教大学教授　奥田　道大
早稲田大学教授　田村　恭
電気通信大学教授　大須賀政夫
法政大学教授　湯川　和夫
東京都立大学教授　半谷　高久
一橋大学助教授　島田　太郎
早稲田大学教授　近江　哲男
東京経済大学講師　村上　勝彦
東京工業大学教授　末松　安晴
東京都立大学助教授　川口　士郎
明治学院大学講師　吉原　功
津田塾大学教授　大東百合子
早稲田大学助教授　浜口　晴彦
中央大学教授　宮崎　犀一
慶応義塾大学助教授　深海　博明
成蹊大学教授　村松　司叙
東京都立大学教授　丸山　洋一
早稲田大学教授　弓削　三男
東京工業大学教授　松田　武彦
東京外国語大学古代史研究会*
東京大学新聞研有志
東洋大学非行学習会
東京経済大学経営学科学生有志
お茶の水女子大学留学生研修
東京学芸大学書道史研究ゼミ
青山学院大学英語劇同好会

工学院大学教授　波多江健郎
千葉工業大学教授　関　龍夫
産業能率短期大講師　石井　正躬
立正大学教授　杉沢　新一
立正大学助教授　斎藤　昌男
千葉大学助教授　田中　国昭
静岡女子大学（学外研修）
国士館大学助教授　滝沢　健児
フェリス女学院大学助教授　小塩トシ子
第72回大学共同セミナー
砧教会
早稲田大学システム科学研究所
八王子市教育委員会
ライフサービス研究所
八王子大丸労働組合
㈱スリーボンド
㈱みやび
稲城市役所
味の素
東京高島屋労働組合
㈱明治屋
小西六写真工業
東京都リクレーション連盟
伊勢丹労働組合
〔個人利用〕
武蔵工業大学助教授　桑原　哲郎
上智大学助教授　本間　英世
イタリア・トリノ大学教授
フランコ・ヴェントゥーリ夫妻
東京大学学生　岡田　尚代
日本女子大学学生　山口　裕子
東京学芸大学学生　村野　啓子
一橋大学学生　平岡　伴一
慶応義塾大学学生　倉林　武
東京家政大学学生　鹿児　富江

▼11月

慶応義塾大学教授　安達　和夫
法政大学助教授　花香　実
慶応義塾大学助教授　山岸　健
東京工業大学教授　江頭　淳夫
東京理科大学助手　日下　泰夫
成蹊大学教授　武田　昌輔
東京農工大学助手　清水　卓夫
東京大学助教授　岡村　甫
日本大学助教授　斎藤　公男
東京女子大学助教授　村松　安子
東京家政大学講師　宮崎　照子
一橋大学助手　栗原　尚子
東京外国語大助教授　秋山　余思
明治大学助教授　佐々木一郎
東洋大学教授　小野　弓郎
学習院大学教授　杉山　正樹
立教大学教授　水本　浩
早稲田大学講師　島田　征夫
東京都立大学助教授　藪下　史郎
慶応義塾大学助教授　森　真作
上智大学教授　吉田　裕
上智大学教授　品川　孝次
東京都立大学教授　下山　瑛二
法政大学助教授　松崎　厳
東洋大学教授　大川　信明
上智大学教授　小糸　忠吾
学習院大学教授　玉野井昌夫
慶応義塾大学教授　池井　優
東京都立大学教授　金沢　孝文
専修大学教授　斎藤　明
早稲田大学教授　鈴木　重勝
慶応義塾大学助教授　関根　智明
明治大学教授　石井　素介
慶応義塾大学教授　有賀　一郎
早稲田大学教授　染谷恭次郎
中央大学助教授　杉藤　忠士
早稲田大学教授　横山　宏

東京都立大学助教授　淵　倫彦
日本大学教授　瀬在　良雄
東京大学教授　内田　久雄
東洋大学経済学部小刈米ゼミ
学習院大学シェイクスピア研究会
東京外国語大学古代史研究会
慶応義塾大学生田研究会
白百合学園高等学校
日本聖書神学校
日本女子大学附属高校
亜細亜大学学友会
東京神学大学教授　佐藤　敏夫
青山学院高等部
女子美術大学教授　郡山　正
東洋大学短期大学講師
E・ハースト
第73回大学共同セミナー
東大・お茶大・学芸大合同セミナー
京浜伝道協力会
参画協会
日本野鳥の会
日本小児神経学研究会
東京都民生局指導部福祉研修課
日野協力会
読売情報開発センター
楢崎産業
日本信託銀行
日本電信電話公社
味の素
日本特殊鋼
武蔵野電気通信研究所
㈱スリーボンド
渡辺測器製作所
〔個人利用〕
相模女子大学学生　山本佐知子
立教大学教授　川鍋　正敏
明治学院大学教授　岡嶋　真理

武蔵大学教授 大竹 健介
東京農工大学教授 大野 泰雄
日本電信電話公社 山口 高典
日本大学学生 菅沼 憲治
跡見女子大学学生 大西 清美
聖心女子大学学生 大沢恵美子

▼12月

明治学院大学教授 中山 弘正
青山学院大学教授 清水 英夫
明治学院大学教授 高野 史郎
法政大学教授 三浦 徳弘
東京都立大学教授 小林 道夫
東京女子大学教授 柏木 恵子
東京都立大学教授 山崎 康男
明治学院大学教授 ***神保 信一
日本大学助教授 原田 行男
中央大学教授 竹村 猛
早稲田大学助教授 渋谷 隆一
国際基督教大学教授 三宅 彰
東京都立大学教授 佐野 博敏
法政大学助教授 野林 正路
早稲田大学教授 村松林太郎
早稲田大学講師 鈴木 二郎
慶応義塾大学助教授 山田 辰雄
明治学院大学教授 増田 茂樹
法政大学助教授 坂口 康
立教大学教授 所 一彦
早稲田大学教授 川又 昇
東京学芸大学助教授 小川 仁
津田塾大学助教授 馬場 伸也
早稲田大学教授 浦田 賢治
早稲田大学講師 出居 茂
早稲田大学教授 矢作吉之助
早稲田大学教授 岡田 純一
早稲田大学教授 染谷恭次郎
早稲田大学教授 川原 栄峰
上智大学助教授 小林 宏晨
学習院大学教授 玉野井昌夫
明治大学講師 山野 康美
明治大学教授 坂本 清
中央大学教授 鮎沢 成男
東京経済大学教授 色川 大吉
青山学院大学講師 都留 春夫
東京大学教授 大田 堯
東京都立大学教授 内藤 謙
津田塾大学教授 大東百合子
早稲田大学教授 畑 穣
明治大学助手 比護 隆界
東京都立大学講師 国井 隆弘
早稲田大学教授 大頭 仁
法政大学教授 岩下 秀男
東京学芸大学助教授 嘉戸 脩
東京学芸大学教授 安良岡康作
一橋大学教授 竹内 啓一
一橋大学助教授 石 弘光
武蔵大学教授 村田 晴夫
青山学院大学教授 渡部 一郎
武蔵工業大学教授 西野 忠
中央大学教授 宮崎 犀一
東京都立大学教授 小林 靖二
上智大学教授 宇佐見昇朗
上智大学教授 尾高 邦雄
東京工業大学教授 榎本 肇
東京都立大学教授 北村 博
中央大学教授 高窪 利一
慶応義塾大学教授 安達 和夫
学習院大学教授 小倉 芳彦
法政大学講師 亀谷 純雄
中央大学教授 小林 昇
東京大学教授 関口 忠
早稲田大学教授 尾関 守
日本大学教授 笠原 正成
法政大学教授 霜島 甲一
慶応義塾大学教授 佐藤 豪
▸中央大学旅の会
明治大学マーケティング研究会
早稲田大学英文科（卒論研究）
一橋大学鴨ゼミナール
明治学院大学経済学ゼミナール
神奈川大学助教授 守谷 栄一
拓殖大学助教授 広瀬 一彦
桜美林大学助教授 相馬 順一
工学院大学教授 荻原 正三
和光大学教授 中野 光
都立公衆衛生看護学院教諭 山口 絢子
埼玉大学助教授 萩原 昌好
工学院大学助教授 長坂 舜二
立正大学助教授 厚東 偉介
独協大学助教授 大久保貞義
大月短期大学講師 村越 洋子
東京女子短期大教授 川村 輝典
東邦大学教授 吉田 光孝
大東文化大学助教授 鈴木 順子
跡見学園女子大教授 大木 正興
杉野女子大学教授 田村 皖司
亜細亜大学学友会
第4回国際学生セミナー
教授聖書研究会
文学教育研究者集団
仮説実験授業研究会
新英語教育研究会
㈶日本生産性本部
味の素
小西六写真工業
〔個人利用〕
京都大学学生 真野 佳博
大妻女子大学学生 山本 智子
共立女子大学学生 小宮 淑子
法政大学学生 宮沢 和子
芝浦工業大学教授 十代田知三

館長日記から

多摩の丘で十回目の元日を迎えました。キャンパスを一巡して感じたことは、たくさんの記念樹が大きくなったことです。周辺の丘陵が開発されてしまったので、セミナーの丘がひときわ樹木が多く、美しい自然になりました。

一年がかりで書きつづけていた創立十年史「大学を開く」の最後の結びエピローグを12月27日に印刷に廻したので、私は肩の荷をおろして年を越しました。2月には刊行し、ご縁の深い方々や連帯の実を体現して下さっておられる千人会員の皆様にご贈呈申し上げたいと存じます。大学セミナー・ハウスの構想を支持して下さった方方の善意を歴史に記したつもりです。大学人の連帯が大学セミナー・ハウスの土台であることを証明したつもりです。千人会がなければ出版費三百万円を捻出する方法はなかったでしょう。美しい資金でこの記念史が刊行できたことを私はほこりとしたいです。「大学を開く」と書名をつけてくれたのは東大の向坊隆教授でした。たしかに「開かれた大学」というより語感に力があり、創造的なセミナー・ハウスのイメージに合致します。書名よく体を表わしています。

近来にない朗報は我らの永井道雄先生が新内閣の清新な目玉商品として異色の文部大臣に登用されたことであります。師走も9日の夜、緊張して首相官邸に入る永井さんがテレビの画面に現われました。私はうれしさいっぱいで、永井文相の誕生を祝福しました。その日の昼頃にそんな予感に接していましたが、その事実をテレビで確認し、次の行動を考えました。セミナー・ハウスの構想が現実の話題になったとき「この人を仲間に入れましょう」といって若い永井教授を私に紹介して下さったのは上代たの先生でした。上代先生のおめがねどおり永井先生はセミナー・ハウスになくてならぬ同志の一人になられました。そのことは近く公刊される創立十年史の中で随所にその名を見るからであります。10日の朝私は上代先生と二人で永井邸を訪ね心からのお祝いを申し上げました。人はよく「セミナー・ハウスから文部大臣が生まれましたね」といわれます。殊にこの丘で永井教授のセミナーに出席したことのある、かつての国立、私立にわたる大学の学生がいまは社会人となっているが、彼らは若き日に永井さんとこの丘で出会ったこと、一緒に夜おそくまで学んだことを誇りに思っているようです。それが出会いの妙というものでしょう。

11月1日の開館十周年記念式典を目指して想を練っています。その日皆さまとお会いできるよう切に祈り願っています。